

## 第7回 大学入試の在り方に関する検討会議 ヒアリング資料

東京都立西高等学校 3年 米本 さくら

### 1, 英語4技能試験について

#### 1) 2020年度からの民間試験活用がもたらした影響

- ・ 複数の候補から受ける試験を選択する上での混乱  
試験の特徴や難易度の違いにより比較が難しい  
試験ごとの受験料の差が著しい  
CEFR の評価が分かりづらい (試験の特色の違いにより試験ごとにぶれも)
- ・ 本申し込みが先着順の試験を申し込む際の混乱  
比較的高校生になじみのあった英検には多数の受験者が集中  
わずかな時間で定員に達し、周囲にも申し込めなかった生徒が多数いた  
仕方なく他の試験を選択：申し込めるかで入試の有利不利まで決まりかねない
- ・ 受験競争が前倒しになることへの不安  
部活動を引退してから本格的に受験のための勉強を開始する生徒にとって不利  
また、十分なスコアが出たらその時点で4技能の学習をやめてしまいかねない

#### 2) 4技能試験の導入で高校の教育に起きた変化

実践的に英語を使うための教育の重要性への認識は以前から浸透していたが、学校によって重視して教える技能にばらつきがあった

↓

入試の変化により、大学入試にむけて筆記試験を重視していた学校の授業も4技能のバランスを重視して構成するように

?そもそも大学入試のために授業を構成するということがあって良いのか

(今後また方針が変わったとき、大学入試の求める分野のスキルに再び偏るおそれ)

#### 3) 留学経験から考える4技能とグローバル人材

- ・ 4技能を複合的に活用する練習も必要  
例えば、実際の Speaking は発音やアクセント位置の把握だけではなく、発音のほ

かにもコンテキストを読み取ることやある程度の文法知識などを活用しながら話さなければならない。話す練習の繰り返しから経験を積むことが何より大切。

#### ・留学プログラムでの学び

母語でない言語をツールとしてコミュニケーションする際に何より重要なのは、発言をためらわず自分の意見を主張しようとする意志と積極性だと学んだ。

日本では授業中手を挙げて発言するということが敬遠されがちで、主張することに抵抗感を覚える生徒が多いように感じる。これでは話す練習をすることは難しい。世界の人と直接的に関わるか否かではなく、世界の誰とであっても通用するような積極的な姿勢とスキルを兼ね備えることがグローバル人材に求められる力であり、大学進学に関わらずより多くの生徒にこうした力を育てる教育をすることが、社会全体の国際競争力を上げるために必要なのではないかと思った。

#### ○私見

- ・英語の試験作成は大学入試センターが一括して行うべき
- ・センター試験のように一定の試験料で統一の試験を受けられるようにすべき
- ・受験者数を含め今までの4技能試験実施についての検討の推移をふまえると、4技能すべてを共通テストで図ることには無理があるのではないか
- ・共通テストでは Reading と Listening、個別試験では Writing というように分担を Speaking についても現段階の設備体制や採点ノウハウの欠如を考えると共通テストで測ることは難しい、現在私立のいくつかの大学で行われているような、個別試験の代わりに民間試験の活用も可能、といった形がふさわしいのではないか
- ・入試はゴールではないのだから、試験内容のいかに関わらず学校では4技能すべてを教える必要がある
- ・座学中心で説明を受け身で聞くのではなく、生徒が主体的に授業に取り組み発言したり双方向に交流したりしながら授業ができるような環境を作るべき
- ・今後の社会を牽引できる人材の育成のためには、大学入試からトップダウンで教育を漸次的に変えていくのではなく、そこまでの教育の内容の見直しと並行しながら入試改革を行うべきなのではないか

## 2, 記述式問題と思考力について

### 1) 記述式問題における問題点(共通テストの規模で行う場合)

- ・ 採点の公平性への不安

共通テスト受験者は 55万人以上

多数の採点官が必要になるが、その質を保証するものも 採点における個人の主観の影響をカバーする術もなく不信感を禁じ得ない

- ・ 受験後の自己採点の難しさ

細かな表現の違いなどを考えると自己採点は困難

センター試験後の 個別試験の出願に混乱が生じる

- ・ 採点ポイントの設置

大量の解答処理のため採点ポイントが設置されることは避けがたい

“点数の取れる記述”へと 発想が固定化されるおそれがある

### 2) 米国大のエッセイから考える“記述”そのものの活用法

米国大の多くは SAT のスコアと GPA に加え、学びのビジョンや興味分野・大学卒業後の進路・今までの自分の活動やどう問題解決を行って来たかなどについてのエッセイを提出したのち面接を行う

人間性や 思考力を含め、社会への関心や大学への学びへの意欲等をエッセイから判断  
(参考：Harvard Univ. Application Tips <https://college.harvard.edu/guides/application-tips>)

→エッセイを書く過程で、受験する生徒の大学での学問への意欲向上や将来の自分のキャリアへの意識形成が為される

大学の アドミッションポリシーと生徒の マッチングがより高い精度で可能になる

#### ○私見

- ・ 記述式問題は共通テストでは採用するべきではない

- ・ 比較的採点の質も適正な受験者数も保証されやすいと思われる 個別試験での記述式問題活用を促進するべき

- ・ 共通テストの範囲内ではないが、思考力の評価はもちろん、生徒と大学のマッチングや将来のビジョンの形成のためにも志望理由書の作成は推薦 AO 入試以外にも拡大してもよいのではないか（点数化はせずとも、“1点刻み“を見直して志望理由書の内容を選考の判断基準の一つとするなど）